論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目：19世紀東アジア宣教における翻訳と啓蒙――韓日比較を中心に――

氏名：金成恩（キム・ソンウン）

本論文では、19世紀の東アジアにおけるキリスト教文献について、特に宣教師が現地での布教のために手がけた翻訳作品を取り上げ、彼らが漢字文化圏に従来から根付いていた翻訳の方法論をどのように活用し、また解体していったのかを考察していく。

漢字文化圏である東アジアにおいて、最初にキリスト教文献が中国の書き言葉、すなわち漢文で翻訳されたことは、中国のみならず日本や朝鮮で布教が成功した重要な要因であった。すなわち、中国の古典を翻訳によって受容してきた長い歴史を持つ日本と朝鮮においては、キリスト教文献が最初に漢文で翻訳されたことによって、それぞれ日本語と朝鮮語への速やかな翻訳が可能となったのである。しかも日本と朝鮮では、自国語に重訳される以前に漢訳聖書が流布しており、漢文の素養を持つ知識人の間で広く読まれていたこともその受容を後押ししたと言えよう。

本稿は、このような背景を前提としながら、東アジアにおける宣教の歴史を原点に立ち戻って再検討し、韓日におけるキリスト教の宣教と受容の相違点が生まれた背景とその過程を明らかにしていくことを目的とする。具体的には「God の翻訳をめぐる宣教師間の用語論争」「宗教小説「天路歴程」の翻訳」「キリスト教新聞「七一雑報」の読書層と言文一致の試み」「李樹廷（イ・スジョン）訳聖書の文体」「在日宣教師ルーミスによる渡米斡旋」といったテーマを取り上げ、キリスト教文献の翻訳のあり方そのものを、言語・文学史・メディア・知識人・学校教育という観点から多面的に検討した。

その結果明らかになったのは、第一に宣教師たちが布教にあたって従来の漢字文化圏における翻訳の方法論を積極的に活用していたという事実である。例えば、本論文において検討してきた『天路歴程』に関しては、それまで歴史的に中国の小説が朝鮮語と日本語にそれぞれ翻訳されてきた形態をそのまま踏襲し、同様のジャンルと文体を採用することによって、翻訳者の負担を減らすだけでなく、読者の違和感を軽減させることに成功しており、この方法が東アジアにおけるキリスト教宣教の成功を導く大きな要因となったと言える。

しかし、Godという唯一神の概念の訳語に関しては従来の漢字文化圏の翻訳の方法論を活用するだけでは不十分であった。そこには非キリスト教地域でどのようにすればキリスト教の唯一神の思想を伝えることができるかという宣教師たちの慎重な配慮と工夫が凝らされるからである。それゆえ在朝鮮・在日宣教師は、それぞれ朝鮮固有語・和語と苦闘しながら聖書の翻訳を試みた。

漢字とハングル、漢字と仮名という二重の表記法を持っている点で、朝鮮と日本は類似しているが、Godの訳語問題は「하ᄂᆞᆷ」（ハナニム）と「神（かみ）」のように、両国でそれぞれ朝鮮固有語と振り仮名付きの漢語に翻訳され、異なる展開を見せた。これは、漢字に対するハングル、仮名の位相が、それぞれの言語体系において異なっていたことを示唆している。

第二に、翻訳語、翻訳文体の問題とは別に、新聞や翻訳者が布教の拡大に大きな役割を果たしていることが挙げられる。キリスト教文献の翻訳は、新しい宗教を伝えようとする発信者の側が、その地域のことばを自ら身に付けて翻訳するという特徴を持っている。また、そのような翻訳を行う宣教師はキリスト教の布教だけでなく、文明開化を同時に目指していた。それゆえ翻訳という行為は、文書伝道や教会という閉ざされた空間に留まらず、新聞やミッションスクールなど、メディアと教育を通して社会に開かれていったのである。

しかし『七一雑報』の例が示すように、紙面の翻訳文体や読者層は庶民への布教という宣教師の創刊意図から離れていった。宗教としてキリスト教を受け入れるというよりも、文化、思想、教養として受け入れて、文明開化を果たそうとする知識階級の読者層の影響力から逃れることはできなかったのである。

これには庶民層の低い識字率とも関わって翻訳書や新聞などの文字媒体の普及には現地の知識人の媒介が不可欠であったという事情も存在する。しかし、彼らは宣教師の意図を越えて徐々に主体的な行動を見せ始める。特に日本のクリスチャン知識人の多くが、近代国家の力学に導かれて、外国人宣教師からの自立を図っていることは見逃せない。すなわち、日清戦争（1894年～1895年）と日露戦争（1904年～1905年）の勝利を経て、日本の知識人は早い時期から宣教師に代わって教会やミッションスクールの実権を掌握していったのである。また「天路歴程意訳（てんろれきていいやく）」の例で示したように、日本では新聞メディアに翻訳が載った時期も早く、それは明治9年（1876）から同10年（1877）にかけてのことだった。

一方、朝鮮では李樹廷という人物が、キリスト教を社会に伝えるメディアになった。当時、朝鮮の近代化のために視察に来た知識人たちの一部が日本でキリスト教信者になっているが、その一人である李樹廷は、在日宣教師に協力して米国系宣教師の朝鮮派遣を実現させるとともに、朝鮮語による聖書の翻訳を行っている。彼にとって信仰とは、自分一人の救いに留まらず、朝鮮宣教を目指すものであり、朝鮮の近代化を図るものでもあった。このように、宗教解禁の時期に海外に出てキリスト教にいち早く触れた知識人は、自ら翻訳者となって自国の社会にキリスト教宣教と近代化の道を拓いたのである。

第三に、キリスト教の翻訳は宣教師主導の宣教から現地知識人主導の受容へと移行しながら社会に向けて開かれていった。この傾向がさらに顕著に現れたのは、学校教育においてである。

日本では『七一雑報』の読者層が示すように、同志社を中心にするミッションスクールの学生たちが、「脱儒教主義」「平民主義」「良心の自由」というキリスト教主義教育に基づいた知識人グループを形成しており、これは当時の「儒教主義」「国家主義」「天皇主義」に基づく公教育とは一線を画していた。そして明治12年（1879）6月に同志社英学校予科（神学課）から第1回の卒業生が輩出され、ミッションスクールの卒業生たちが日本のキリスト教界の重鎮として活躍するようになる中で外国人宣教師からの自立の気運が高まっていった。さらに、明治23年（1890）の教育勅語や明治32年（1899）の文部省訓令12号の発布など、キリスト教主義教育に対する日本政府からの干渉や統制が厳しくなるにつれて、ミッションスクールは学校運営のために国家主義と妥協する道を選択することになる。

こうして日本のクリスチャン知識人たちは、「教育と宗教の衝突」という問題に直面して「日本的キリスト教」の形成を模索するになり、宣教師に代わって教会や学校の実権を掌握し、日清戦争（1894年～1895年）や日露戦争（1904年～1905年）を経て、愛国的で帝国主義的な論調に傾斜していく。ちなみにキリスト教文献の翻訳において、振り仮名付きの漢語や訓読体漢字仮名交じり文が定着していった背景にも、このような日本の知識人の実権の拡張があったと考えられる。

いずれにしても、キリシタン禁制の高札撤去を契機にキリスト教が黙認され、宣教師の布教が本格化したのが明治6年（1873）だったことを鑑みると、明治10年代半ばに外国人宣教師からの自立を目指したのは時期尚早だったと言えるだろう。この早すぎた自給独立論の影響で農村地域の教会は自給が叶わず衰退に向かい、信者は大都市の教会を

中心とした中産層以上の階級に限られることになった。一方で、注目すべきことには教会が自給独立した後もミッションスクールは外国から経済的支援を得ており、その結果今日の日本においては、布教の足跡が教会よりもむしろミッションスクールに関わった形で残っている。こうした宣教師主導の宣教から現地知識人主導の受容に移る時期の早さは、朝鮮と日本のキリスト教普及率に差が生まれた大きな原因であると考えられる。

それに対して朝鮮は、アンダーウッドが朝鮮に入国してプロテスタント宣教を始めた1885年から間を置かずに日清戦争（1894年～1895年）や日露戦争（1904年～1905年）が勃発し、列強の対立へと巻き込まれていく。結局1910年に植民地時代に突入し、朝鮮では「キリスト教主義の近代教育」が朝鮮政府や朝鮮の国家主義と正面から衝突する時機を逸することになる。むしろ、米国留学経験のある朝鮮の知識人たちが米国系宣教師や米国の政治性を背負いながら、日本の植民地支配権力を相対化し、朝鮮の独立を図る勢力として成長していった。

朝鮮が宣教師の教権から離脱するまでにはプロテスタント宣教開始から半世紀以上の歳月を要している。1935年の皇民化政策による神社参拝の強要、また1941年の太平洋戦争の開始をきっかけとして米国系宣教師たちが朝鮮からの撤収を余儀なくされるまで、彼らは教会及びミッションスクールにおいて実権を保持していたのである。これは宣教師が教権に固執した、もしくは朝鮮人が宣教師に依存したという訳ではない。キリスト教が朝鮮において世界でも類例がないほど短期間に高い普及率を達成した歴史的背景には、米国系宣教師の政治性を活かして日本の支配を相対化しようとした朝鮮人の選択と、それによって生じた宣教師から現地知識人への主導権移行の遅れが大きな要因として働いていたと考えられる。